

## 1 学校教育目標

人間尊重の精神を基調として、一人一人の児童を大切に、自己肯定感を育む教育を推進することで、社会に貢献できる心身ともに健康で知・徳・体のバランスの取れた人間性豊かな児童の育成をめざす。

- やさしい子      ○ がんばる子      ○ げんきな子

## 2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	～児童・保護者・地域から信頼され愛される学校～ ・基礎学力が定着し、豊かな心が育ち、いじめを許さない学校 ・全教職員が創意を發揮し、熱意と誠意をもって、協働している学校 ・家庭、地域、異校種、関係機関等と連携し、安全・安心で開かれた学校
○児童・生徒像	・「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」が生まれ、将来の社会を生き抜く力の基礎が育っている児童 ・互いの気持ちを思いやり、人権を尊重し、規範意識をもった児童 ・進んで運動に親しみ、心身を鍛える健康な児童 ・大きな夢をもち、自分の課題を最後までやり遂げる児童
○教師像	・教師としての使命感・熱意・愛情をもち、社会性に富んだ教師 ・児童にとって、楽しい授業、よく分かる授業、主体的に学ぶ授業を工夫できる教師 ・安全、安心に配慮し、子ども一人一人を大切に教育を推進する教師 ・保護者や地域の人々と連携し、児童や保護者、地域から信頼される教師

## 3 学校の現状及び前年度の成果と課題

### (1) 学校の現状

#### ○児童について

- ・年々児童数が減少しているが、次年度は改善傾向が予想される。児童は穏やかで素直であり集団行動ができる。朝の遅刻者は多いが、完全な長期欠席児童はいない。
- ・各学年とも少人数で児童同士の仲が良い。また他学年との交流が多く、学年をまたいだ友人関係が築けている。
- ・学校では学習を真面目に取り組み授業中も落ち着いているが、読解力や自ら考え表現することと、家庭学習の習慣化に課題がある。
- ・ICT機器の取扱いには抵抗感がなく、1年生から全員がAIドリルや、グーグルクラスルームを使いこなしている。

#### ○教職員について

- ・学級担任のほとんどが、教職10年未満の若手教員であるが、自らの職務に責任をもち、自己研鑽・啓発に努めている。少人数のため、学級担任以外でも全校児童を把握しており、直接児童に話しかけたり、一緒に遊んだりする場面が多く見られる。

#### ○保護者・地域について

- ・学校の教育活動を温かく見守ろうとする保護者や地域協力者が多く、教員も保護者から励まされることがある。一方、教育に対する関心や基本的な生活習慣の定着に関しては、各家庭事情もあり差が大きい。保護者会への参加率は低い为学校行事や授業参観等には進んで参観している。

## (2) 前年度の成果と課題

- ・学力向上に関する成果は、低・中学年の通過率が高く、補足的な学習を要する児童が数名しかいないことと、意識調査の中で「将来に夢を持つこと」「読書」に関する意識が高いことである。このことは今後、学びに向かう力の育成につながるものとする。
- ・学力向上に関する課題は、国語の「知識・技能」領域の正答率が低いことである。特に学年が進むにつれ下がり、第6学年では区平均を40ポイント近く下回っている。中でも「言葉・情報・文化」に関する内容が低い。また意識調査から「家庭学習習慣」が区平均を大きく下回っている。
- ・通塾率の低い本校においては「家庭学習を充実させること」で学習習慣を定着させること、「短作文の取組を定着させること」で語彙力や学んだ漢字の活用をさせ、書く力と読解力の向上を図ることが必要である。
- ・校内研究を理科・生活科に絞り国立教育政策研究所教育課程実践検証協力校に指定されたことで、教員の授業力向上につながった。
- ・心と体の健康づくりについては、コロナ禍で体力の低下が顕著である。今年度は持久走、短縄、長縄等の取組が計画通りできたので、今後「オリンピックタイム」や「学校で朝ごはん」等の特色ある教育活動の充実を図り、体力向上を目指すとともに、健康教育や食育を継続していく。

## 4 重点的な取組事項

	内 容	実施期間（年度） R:令和				
		R3	R4	R5	R6	R7
1	学力向上アクションプラン	○	◎	◎	◎	◎
2	教員各自の専門性の向上	○	◎	◎	○	○
3	心身の健康づくり	○	○	○	○	○

## 5 令和5年度の重点目標

重点的な取組事項－1		学力向上アクションプラン			
A 今年度の成果目標	達成基準 (目標通過率)	実施結果 (通過率結果)	コメント・課題	達成度 ◎○△●	
①「読む力」「書く力」「語句理解」「計算力」等基礎学力の育成 ②主体的に学習に取り組む児童の育成	①4月区調査通過率 国語75%、算数80% ②家庭学習定着率70%	①4月区調査通過率 国語75.3%、算数87.0% ②家庭学習定着率 4月55.3%、3月未集計	①昨年度比、通過率で国語4.2ポイント算数11.1ポイント、正答率で国語7.1ポイント算数6.6ポイント上昇した。要因として、日々の授業へ取り組む態度改善と、自ら問題を見出し解決する児童を目指した校内研究による教員の指導力向上が考えられる。観点ごとに見ると「書くこと」に関する正答率が全国平均を下回っており課題 ②家庭学習の取組でA Iドリルを利用した課題と、自らが設定する課題の両面で取り組んだ。自学自習の習慣が定着してきている。	◎	

B 目標実現に向けた取組み									
新・継	アクションプラン	対象学年 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認 方法	達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
新規	作文タイム	全学年 国語	7月までに週1回以上	パワーアップタイムの時間を活用し、全学年で低学年50文字程度、中学年以上100文字程度の作文を毎週実施(第1学年は7月から)	9月から12月のワークテストのうち「書く力」「読む力」の正答率	第1～3学年 80%以上 第4～6学年 75%以上	9月からのワークテストで「書く力」「読む力」の正答率 低学年 74.9% 高学年 79.9%	中学年が率先し短作文に取り組み、全学年に定着した。成果は廊下掲示し児童相互に学びあえるようにしている。	○
新規	算数検定	全学年 算数	年間10回(通年)	各学年の学習内容を10回に分けてプリント問題作成 毎月1回(8月3月除く)検定	90%以上を合格として合格書の割合を毎回算出する	全学年平均 70%以上	第4回 漢字検定満点合格者 51% 計算検定満点合格者 50%	合格基準を90%から満点に変更、漢字検定も追加実施、事前練習問題を「修行編」として提示し予習機会を設定した。	◎
新規	宿題以外の家庭学習の取組	第2学年以上 全教科	年間(2年は後期から)	家庭学習の慣化と興味ある学習等で自ら課題設定し追究する力の育成を目的に ・宿題とは別に自ら考えた課題で家庭学習を行う ・模範となる自習ノートのデータベース化	①各学年の模範事例をデジタル化してフォルダ管理 ②児童アンケート	①10月までに全学年10例以上を掲載 ②家で宿題以外の勉強をする児童70%	①10月までに20例以上を掲示、データ化未だ。 ②家で宿題以外の勉強をする児童は60.5%	①1月までに50例以上の優れた家庭学習(自学自習)を掲示できたが、特定の学年に限られている。 ②昨年度比5.2ポイント上昇した。	△
継続	AIドリルを核とするICTを活用した学習の強化	全学年 全教科	通年 特に算数 授業と家庭学習で	全児童が日常的にAIドリルを活用して知識技能面を重点的に学習する。特にデータ蓄積を兼ねて、家庭学習を含めて多く取り組んでいく	週一回以上担任が点検する	算数でAIドリルを全児童が活用し、3月までに区調査通過率を各自5ポイントは上げる	2月に調査実施予定	AIドリル強化月間での平均解答数は609問で目標を上回る	○

継続	全学年による英語学習の継続	全学年英語	通年 低学年 10時間	3年生以上はこれまで通り。 1・2年生は指導計画に基づきADと協働で授業	年間計画に基づいて実施	1・2年生においては年間10回以上の外国語授業を実施する。	12月までに第1学年で8時間、第2学年で7時間実施	外国語アドバイザーの配置がなくなり、学級担任が実施、連携中学校英語教諭の支援を受ける	○
継続	学校及び公立図書館の活用と読書マラソンの継続充実	全学年国語	通年	自由読書50冊で読書マラソン1回達成 1回達成する毎に認定書を校長から授与	読書マラソンパンフレット(50冊分)を作成し、連番を付して達成回数を把握	第1・2学年5回 第3学年以上3回	12月末までの「読書マラソン」達成回 第1・2学年3.9回 第3学年以上0.6回	高学年は読む本のページ数が多く、50冊達成が難しい状況であり、1回以上と目標へこうすべき	△
継続	放課後補充教室	全学年 国・算	通年 週3回	学習につまずきが見られる児童を選び個別に指導	授業における児童の変容を観察する。	年間において20分×週3回以上実施する	漢字・計算検定不合格者を対象に合格するまで実施	通常の授業でつまづいている児童と検定不合格者を対象としたことで基準が明確になった	◎

重点的な取組事項－2		教員各自の専門性の向上			
A	今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
	①全教員が児童主体で学ぶ問題解決型の授業を展開できる ②全教職員がICTのスキルを高め、日常的に活用できる	①2月区調査再テストで活用に関する問題正答率5ポイント上昇 ②ICTリーダー育成プログラム「認定教育者レベル1」の合格教員5割	①2月実施調査通過率は国語61%、算数63%、4月実施より低下 ②「認定教育者レベル1」1名受不合格、「レベル2」1名受験合格	①2月の区調査については次学年実施内容なので正答率は低かったが、無回答は減少した ②ICTを活用した授業は、日常的に実施されている。児童・教職員のスキルも向上している	△
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度

各教科で児童主体の問題解決型授業を展開	・2月区調査再テストで「活用」に関する問題正答率5ポイント上昇	・年7回(理科4回、生活科2回)の授業研究 ・国立教育政策研究所教育課程実践検証協力校に指定され、学力調査官等からの指導を受ける	2月実施現在集計中	・年6回(理科4、生活科2)授業研究 ・国研協力校継続	
全教職員がICTのスキルを高め、日常的に活用できる	・ICTを活用した授業を全学級公開 ・ICTリーダー育成プログラム「認定教育者レベル1」の合格教員5割	・ICTエリアモデル校に指定され、小中連携で成果となる授業を公開 ・全学級でGoogleクラスルームを毎日活用	・ICTを活用した研究授業全学年実施、DX推進モデル協力校12月に公開研究会を実施、認定教育者レベル1不合格、2合格 ・全学級で毎日Googleクラスルームを活用	・校内研究の授業研究のうち、1回はリーディングDX推進校として全国公開 ・タブレットは毎日学校と家庭で活用	○

<b>重点的な取組事項－3</b>		心身の健康づくり			
<b>A 今年度の成果目標</b>	<b>達成基準</b>	<b>実施結果</b>	<b>コメント・課題</b>	<b>達成度</b>	
①「投げる力」を中心に、体力の向上を図る。 ②いじめ防止の徹底と早期発見、早期対応、早期解決、深刻ないじめ根絶	①「ソフトボール投げ」の東京都Tスコアを第3学年以上で男女とも47以上 ②4か月以上継続するいじめの件数を0にする	①Tスコア47以上第3学年男女、第5学年女子、第6学年男子で5割達成 ②4か月以上継続したいじめ件数2件	①投げ方教室やオリンピックタイムで取り組んでいるが成果は和スカである ②事象自体は再発していない	△	
<b>B 目標実現に向けた取組み</b>					
<b>項目</b>	<b>達成基準</b>	<b>具体的な方策</b>	<b>実施結果</b>	<b>コメント・課題</b>	<b>達成度</b>
オリンピックタイムの充実	・体力調査で、全学年男女全種目(96項目)のうち50%(48項目)以上が都平均以上	・オリンピックタイムで実施している種目の見直し(4月) ・11月持久走の取組、12月短縄の取組、1月長縄の取組	・体力調査で都平均以上を達成した種目数 男子13種目、女子11種目、計24種目で25%が都平均以上	・各教職員が工夫し新たな種目を考案し、毎月学年をローテーションさせて実施 ・各取組1カ月遅れで実施中	△

教員の体育指導力の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>年2回の体育実技研修会を実施する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>2領域以上で実技研修会</li> <li>自主研修会で体育研修実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「エリプスセンス」を利用した投げ方教室を実施</li> <li>自主研修会では保健に関する研修を実施（11月）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>行政や民間企業と連携した取り組みができたが、すぐには成果が出ない。</li> </ul>	○
学校で朝ごはん	<ul style="list-style-type: none"> <li>栄養バランスのとれた朝食で一日をスタートする習慣を身に付けるため、年間6回以上「学校で朝ごはん」を実施</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>民間企業からの支援金を活用し食材を購入し、地域ボランティアの方の調理による朝ごはんを学校で食べる。全校を2グループに分け、希望する児童が参加する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>3学年ずつグループ分けをし、全体で6回、各学年3回の「学校で朝ごはん」を実施、参加率6割程度</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>コロナ禍が明けて、計画的に全6回を実施できた。地域の協力者も実施方法に慣れて今後も継続できる見込み。</li> </ul>	◎
いじめの早期発見、対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>いじめアンケートで「いやなことがあったときに、相談できる人はいますか」の回答を第2回までに0にする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>いじめアンケートで「相談できる人がいない」児童を全職員で共通理解（10月）</li> <li>校内支援委員会で誰が相談窓口となるかを決定（11月）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>いじめアンケートで「相談できる人がいない」児童3名を全職員で共通理解（12月）</li> <li>校内支援委員会で誰が相談窓口となるかを決定（第1・5・6学年）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>3名の児童について全職員が個人名で把握し、行動観察するようにする。</li> <li>現在のところ心配な言動はないが継続観察する。</li> </ul>	△
いじめの早期解決	<ul style="list-style-type: none"> <li>いじめとして把握した場合児童と保護者の不安を5か月以内にすべて解消</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アンケート内容を管理職がすべて把握</li> <li>毎月の生活指導全体会で、いじめに関する案件を把握</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>公務用PCにショートカットを作成し随時確認</li> <li>職員会議後に生活指導全体会を毎月開催し情報交換</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>個表作成は1件、SNSによるトラブルによる訴えに全校で対応しているが一覧表への入力タイミングが遅い。</li> </ul>	△

## 6 まとめ

### (1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

- ・学校全体平均を昨年度と比較すると、通過率で国語 4.2 ポイント算数 11.1 ポイント、正答率で国語 7.1 ポイント算数 6.6 ポイント上昇したことから、全体的に学力が向上したといえる。
- ・上昇した要因として、日々の授業における児童の学習に取り組む態度と、自ら問題を見出し解決する児童を目指した校内研究の充実による教員の指導力向上が考えられるが、国語の「知識・技能」領域の正答率が低いことが課題である。
- ・校内研究を理科・生活科に絞り国立教育政策研究所教育課程実践検証協力校に指定されたことで、教員の授業力向上につながった。
- ・心と体の健康づくりについては、オリンピックタイムや持久走、短縄、長縄等の取組が計画通りできた。また、学校で朝ごはん等の特色ある教育活動を通じ、健康への意識づくりを図った。今後は、さらなる体力向上を目指すとともに、健康教育や食育を継続していく。
- ・いじめについては、発見件数に計上した大部分は勘違いや解決済の内容であったがSNSの安易な利用によって心を痛めたという案件もあり、さらなる情報モラル指導が必要となっている。

### (2) 保護者や地域へのメッセージ

- ・本校は小規模校ですので、一つの行事を開催するためには一人一人の活躍が必要となります。他校では学年代表となる児童は、ほんの数%かもしれませんが、本校では1年間で何回も自分が主役となる場が訪れ主体性を育むことができます。
- ・学習につまずきのある児童には、放課後補習やサマースクール等で個別指導を実施するとともに、A Iドリル等の活用により自ら学習を進められるようにしています。しかし、個に応じた課題を克服するためにも、自学自習の習慣化が必要です。ご家庭での協力をお願いします。
- ・学年を越えた交流機会が多くあります。教職員も全児童と関わっていますので、一人一人の実態をきめ細かく把握することができます。いじめ認知件数も多くはありませんが、大人が気付かないところで悩みを抱えている児童もいるという前提で、保護者や地域と綿密に連携していきます。

### (3) その他（学校教育活動全般について）

- ・校内研究を通じて児童に身に付けさせる学力について、教職員で共通理解し、実践に生かすことができた。
- ・文部科学省リーディングDX推進協力校として取り組む中で、児童も教師もICT機器を当たり前のように使うようになった。
- ・一人一人の児童を複数の教職員が見取り支援する体制が確立されているので、いじめや不登校の早期発見・対応につながった。
- ・漢字検定、計算検定、持久走記録会、読書マラソン等、多くの機会で表彰を受けることがあり、児童の意欲の向上につながった。
- ・自学自習の取組、短作文の取組について、重点的に行ったことにより児童に定着し始めたが、まだ全学年の日常活動にまでは定着していない。
- ・健康や体力はすべての活動の基礎となるものであり、次年度はさらに重点的に取り組む必要がある。